

## 幸津先生の旅立ちを祝して

社会福祉学科 学科長 林 浩 康

幸津先生はご定年をお迎えになり、ご退職されることとなりました。先生は東京大学文学部倫理学科をご卒業後大学院に進学され、都留文科大学に職を得られました。その後ご退職され、フンボルト財団奨学研究者としてドイツにご留学され学位を取得されました。平成元年に日本女子大学に赴任され23年間ご勤務され、主に社会思想論や倫理学概論等をご担当いただきました。

先生は平成3年に『哲学の欲求 ―ヘーゲルの「欲求哲学」』をご出版され、継続してヘーゲル哲学のご研究に携わりながら、江戸町文化や韓流ドラマなどを題材にいくつかの論文やご著書が出版されています。「人間観」を根底的な共通テーマとし、さまざまな題材を表題に人間の本質に深く迫る論考をなされています。

筆者が赴任する前の歓送迎会におきまして、幸津先生が歌声を披露されてから、何度か歌声をお聞きする機会に恵まれました。レパートリーが幅広く、そのリズム感のよさに感心させられたとともに、学生の保護者の前であろうが、教員の集まりの場であろうがいかなる場においても積極的に歌声を披露される度胸の良さにも感心させられました。

また、筆者が赴任した1年目に江戸町学習を目的としたフィールドワークにおいて、学生と一緒に歩かせていただいことも、今となっては懐かしく感じられます。事前に藤沢周平作品の朗読を聴き、7月の炎天下の日に門前仲町を中心に芭蕉記念館などを巡って深川飯を食べ、清澄庭園を歩く頃には私は完全にばてておりました。最後に深川不動尊を巡りかき氷を食べ多少回復して帰宅したことを思い出します。本来、深川江戸資料館での学びを最大の目的としていたのですが、改修のための長期休暇で、がっかりしたことも思い出されます。私は学生とともに少々熱中症気味でぐったりしていても、先生はお元気に颯爽と歩かれている姿を拝見し、先生の強靱な体力に感心させられました。また季節のいい時期に再度ゆっくり歩いてみたいと感じられた魅力的なコースでした。

先生のいかなる状況であっても、自らの考えやペースを通し我が道を着実に歩まれるお姿に、ある種の羨ましさを感じられた方々も多いのではないのでしょうか。先生と共に共有した時間の思い出は、多くの方々の心に残り続け、その思い出により励まされる方々も多いと思います。

今後とも末永く本学科との交流を継続していただき、ご活躍されますことを心より祈念しております。

